令和３年度　三春町総合教育会議　会議録

１　招 集 日 時　　令和４年３月１５日（月）　午後１時３０分

２　招 集 場 所　　三春交流館「まほら」小ホール

３　出　席　者　　町長　坂本浩之、教育長　添田直彦、
教育長職務代理者　太田文枝、教育委員　宮田美穂、教育委員　菊地和裕

４　事　務　局　　総務課長　宮本久功、教育次長兼教育課長　本間徹、
生涯学習課長　藤井康、歴史民俗資料館長　平田禎文、
町民図書館長　渡辺貞子、児童生活センター所長　大内江利子、
総務課庶務グループ長　今泉喜徳、教育課教育総務グループ長　大内佳代子、
生涯学習課生涯学習グループ長　佐久間久美、
生涯学習課社会体育グループ長　佐久間正浩、教育課主任主査　小野寺百絵

５　傍　聴　者　　なし

６　開　　会　　午後１時３０分

７　閉　　会　　午後３時５分

８　会議の概要

（１）　開会

（２）　町長あいさつ

（３）　協議事項

・三春町第１期教育大綱の進捗状況について

・その他

（４）　その他

（５）　閉会

＜町長＞

三春町第１期教育大綱の進捗状況について、協議したいと思います。まず、教育課事業についてご意見、ご質問等お願いします。

＜宮田委員＞

主体的・対話的で深い学びを実現する授業改革について、とりあえずグループの形を作っておけば話し合いになっているということがないか懸念がある。表面的な対話形式によって、かえって主体性が失われてしまうのではないか。授業での子どもの動きや変化を先生たちがしっかりと見ないと、主体的・対話的な形を作っても進まないのではないか。現場では先生たちの子どもたちの変化を捉える視点がどのくらい進んできているのか。どのくらい現場では改革ができているのか。

＜教育次長＞

ご指摘のとおり、このような活動をする場合には、子どもたちが話しやすいようにグループ学習の形の方が進みやすいのだと思う。その中で子どもの動きや変化を見極めることが実際にできているかということだが、授業改革はそもそも教師が今までやってきたことを一部否定されるようなものになるため、一朝一夕に簡単にできるものではないと理解しているところである。授業の研究を一生懸命やっていこうという機運は醸成されつつあり、取り組もうという姿勢は各学校見えてきているものである。順調に進めることをバックアップしながら、いずれそういった形で見守れる先生たちがたくさんいるようにしていきたいと考えている。

＜宮田委員＞

児童・生徒一人一人の学びが保障される環境づくりについて、先生が子どもたちに接する時間を多く持つために働き方改革を行っているという内容だが、具体的にどのような改革が行われて、実績としてどのくらい改善されているのか。

＜町長＞

現場での働き方改革の具体例を教えてほしいという趣旨ですが、事務局いかがか。

＜教育次長＞

働き方改革の目的は、子どもに向き合う時間を作るということだが、働き方改革を阻害している色々な要因がある。その一つとして事務作業等の効率化が避けては通れないものだと考えている。事務の効率化を図るため、校務支援システムを導入している。まだ導入したばかりであるが、作業の標準化をしていくことで先生たちの負担を軽減させていく。県の統一システムを導入しているので、他の学校に異動した際に、このシステムが導入されていれば、スムーズにいくと思う。そういったことをサポートさせていただいている。ICT 機器の導入についても、事業者を通じて ICT 支援員を各学校に派遣している。機器の使い方や、授業でどういう形で使うかなど、サポートしている。また、三春中学校に部活動支援員の配置も行った。音楽につ

いて造詣の深い方をお願いしたところである。そのような支援をさせていただきながら、負担感の軽減につながるよう対応した。

＜宮田委員＞

それによって現場は改善されたといった声は届いているのか。

＜教育次長＞

例えば、校務支援システムの導入ということだが、最初は対応のための負担は増えることになる。その効果が表れるのは、業務を標準化したときで、いますぐにその結果が出たかといえば出ていない。しかしながら、いまやらないといつまでも出来ないので、それを踏まえつつ事業の改善に向けて対応をしているところである。効果がすぐにみられるかというとそこまでではないが、それをしないといつまで経っても負担軽減につながらない。適宜考えられることについては実施してきたい。

＜町長＞

具体的に例えば先生が早く家に帰れるようになったり、子どもとの時間が増えたりといった具体的な声はまだ出ている段階ではないけれども、今後徐々に効果が出始まってそういった方向になるであろうということである。

＜宮田委員＞

グローバ化する社会に適応するための英語教育の充実について、現在の英語教育助手は長年交代していない。それによって活用状況が形骸化してしまうなど弊害がないか。長い期間勤めているので、そこでできあがった信頼をもとに発展的な授業展開をしていっているのか。また、コミュニケーションはとても重要であるが中学生は受験対策もある。学習指導要領が変わってから、例えば中学３年の内容に高校でやっていた内容が入り込んできて文法事項の量も増えている状態で、コミュニケーションに偏った授業だけではなく、受験対策にも対応したバランスを考えた授業をしていかなければならないと感じた。

＜教育次長＞

長期雇用による弊害はないと考える。非常に熱心に向き合っていて教材の研究等にも取り組んでおり、よい方に巡り会えたと思っている。発展的な内容について活用できないかということだが、昨年度の指導要領の改訂から小学５・６年も英語が教科化となった。そこで英語を初めて指導する先生方との間に指導主事が入って授業の在り方、やり方など相談にのっている。英語教育助手との連携も考えているので、発展的なことができるといいと考えている。また、カリキュラムについて、小学校５・６年生に教科化が下りてきているので、中学校でやることが小学校に、中学校には高校の分が下りてきているので、全体としては対応しなければならない内容が増えているのだが、順次カリキュラムが下りてきているという中で吸収してく形になる。

＜宮田委員＞

全国学力テスト正答率について、令和３年度の実績が平均値 100 を下回っている。発展的なことも大事だが、基礎的な力をしっかりと定着させるべきである。

＜町長＞

次に他の委員からもご意見いただきたい。

＜太田委員＞

昨日、高校入試発表があった。学校アドバイザリ事業や GIGA などいろいろ実施しているが、他の町や県とも戦わなければならない場面もたくさんあると思う。最低限 100 はほしいと思うので、今後の先生方の奮起を期待する。

＜教育長＞

全国学力テストは令和２年度は中止となったが、平成２６年度以降のデータでは、全国平均を超えたのは、小学校６年の国語は６回中３回、算数は６回中２回、中学校３年の国語は６回中５回、数学は６回中２回であった。ベンチマークはとても重要なので、それぞれ学校で意識しながら指導して子どもたちに力をつけさせているところだが、こういった実態が続いて今年度の成績になっていると思う。

＜町長＞

菊地委員お願いします。

＜菊地委員＞

ICT を利活用した学びの充実について、一人一台のタブレットを効果的に用いたわかりやすい授業を展開したということで、今後もタブレットを使いながら授業を充実させていっていただきたい。その結果、平均値を上回っていってほしいと思う。

＜町長＞

本日欠席の宗像委員より意見等をいただいているので、紹介していただきたい。

＜教育次長＞

１点目、学校施設に関してトイレの洋式化について、教育のために幼児期の和式トイレも必要なのではないか。

２点目、GIGA スクールについて、先生が機材を使いこなすまでは大変であるのでがんばってほしい。

３点目、タブレットはリモート等コロナ禍での教育には良いツール。個人的には小さい時に創造する教育にも力を入れるべきではないかと考える。

４点目、防犯対策について、ほとんどの児童が車での送迎である。もともと子どもの数が少ないのに、更に徒歩通学の子が少なくなることで危険性が増えるのではないか。集団の登下校も勉強の部分があった気がする。

５点目、コロナについて、三春町は感染者等に気をつかってか詳細な発表を避けている感じがする。岩江地区のコロナクラスターの現状と今後のケア。どのように対応してどんな成果や失敗があったのか、そして保護者はどんな反応を示したか。それに対して今後他の地区で起きた場合の対策や課題はどう考えるか。

＜町長＞

回答お願いします。

＜教育次長＞

トイレの洋式化について、現在、和式トイレがあるのはこのような趣旨があってのことだったと思う。生活様式が変わってきたので、今後は洋式のトイレが一般化することを考慮し、来年度からトイレ洋式化事業を実施するところである。

GIGA スクールについて、タブレットの導入当初は大変だと思っていたが、実際に使ってみると案外使えるという声があり、前向きに使っていただいている。創造的教育にも力を入れるべきではないかということであるが、タブレットにペン等をつけており、今後学校の現場の中で様々な活動に使えるツールになると思う。

通学路について、集団登校ができなくなってくる状況が出てくると思うが、地域の見守り隊などの見守りもあるので、通学路の危険個所の改善も含めてバックアップをしていきたい。

コロナについて、感染情報は非常に厳格に守る必要があるため、こういった感想を持たれるようになったのかと思う。残念ながら学校でコロナのクラスターが発生してしまった。感染症なので、いつどこでも起こりえるものであると思っているところであり、起こったときにどう対応するかを考えながら対策を講じてきた。今回の場合、１日３～４人続けて発症したので、学校内での感染を封じ込めるために、まず学年閉鎖を実施し、翌日には学校閉鎖をし、状況を踏まえて休校の時期を延長するなどした。成果としては封じ込めることができたと考えているが、保護者がどのような対応をしたかというと、子どもたちの感染拡大する中で学校の登校自粛をさせるようなことがあった。今後も徹底した感染対策をしつつ、感染の拡大が見込まれるという場合には速やかな学級閉鎖、学年閉鎖等をしていきたいと考えている。

＜町長＞

生涯学習課の説明を受けて、ご質問・ご意見等お願いします。

＜宮田委員＞

コロナ禍の中で事業を中止せず縮小しても続けられたことがすばらしいと感じた。町民の年齢によらない学びの拠り所になっていってくれることを期待している。

＜太田委員＞

広報「みはる」を読んでいると、わたしの年齢でも参加したい事業がけっこうあって、素晴らしいと思っている。「学校を核とした地域づくり研修会」を初めて実施したが、学校を支え

る地域の方々の話し合いができ、とてもよかった。地区の懇談会もあるのだが、ざっくばらんに意見が出てこない。この研修会では講演会の後に話し合いをしたので、刺激を受けながら熱のこもった会議ができたと思う。毎年実施するのは難しいと思うが、ぜひ今後も続けてほしい。また、ご高齢向けの成年後見人制度等についての勉強もあった。音楽はいままでも頑張ってきた事業なのでこれからも継続して実施されたい。楽しかったり勉強できたりといった機会が多かったと思う。「学校を核とした地域づくり研修会」だが、成果などは事務局ではどのように評価しているか。

＜生涯学習課長＞

この研修会については、学校が先生と子どもだけで成立するのではなくて、地域の皆さんといっしょに学校づくりをしていこうということを考えて実施した。生涯学習課サイドだけではなくて、教育課サイドも含めて教育委員会全体の事業ということで実施をしたものである。当然、その中には校長先生、教頭先生をはじめとして学校運営協議会委員の皆さん、地域の皆さんということになるが、いっしょに課題を解決したり新たな展開をどのように進めていったらいいかと話し合ったりする研修会であった。それが実現した部分があるかどうかまでの確認には至っていないが、そういう話し合いをすることで、とかく定型化した話し合いが多い会議が発展的にこれから様々な意見を出し合って、学校づくりに地域の方を巻き込んで進んでいくのではないかと考えている。実績という点では、すぐにという訳にはいかないが、そういうことを期待している。

＜教育長＞

現在、次年度のカリキュラム作りの最終段階に入っている。教育課で学校と話しをしているのだが、カリキュラムに地域独自の色が鮮明にでてきた。中郷小のカリキュラムは中郷小で、沢石小のものは沢石小でしか使えないものになっている。目の前にいる子どもたちにどういう活動を経験させ、どういう方たちの支援の下に何をどう学んでいくのかという設計図が書かれているわけだが、それぞれの学校で特色のあるものが作られて、それを各学校の学校運営協議会で委員の方たちに承認いただいた上で次年度がスタートするのだが、承認いただいたということは協力すると皆さんに言っていただいたということである。もちろん学習指導要領に沿っているが、非常に地域の色が反映されていて、子どもたちの生活に根差したものが作られているということが大きな成果だと考えている。

＜菊地委員＞

まほらミュージックプロジェクトについて、内容が充実していて感心する。こういったプロジェクトを今後も継続して町民や、町民以外の方たちにも注目を受けるようなものを実施してほしい。

また、文化財についても、三春町は周辺市町村に比べると長年の歴史、文化があるものと思

っている。文化財や施設、伝承館等、注目を浴びるような施策や充実したプロジェクトを作っていただきたい。

図書館については、町民が利用しやすいように開館時間を１時間延長し、恵まれた環境になった。こういった町民が利用しやすい施設づくりを今後も進めていってほしい。

＜生涯学習課長＞

まほらミュージックプロジェクトは、ホールでのコンサートだけでなく、学校の子どもたちへの指導や児童生徒のみなさんが学校の枠を超えていっしょに活動する等、様々な体験ができたと感じている。アマチュアの方たちについても、発表の機会がないというところに光を当てるということで実施しており、次年度以降についてもそのコンセプトを維持しつつ、さらに発展的に進めていきたい。文化財について、文化財保存活用地域計画の策定を次年度以降進めていく。町内に様々残されている文化財を保存するのはもちろんのこと、それを活用していくという計画をしっかり立てて、それに基づいて町の振興につなげていきたい。図書館については、これからも利用しやすいよう充実させていきたい。

＜町長＞

宗像委員からの意見をお願いします。

＜教育次長＞

宗像委員より図書館について意見等を預かっているので、読み上げる。

何人か身近な人に聞くと図書館に求めるのは居心地の良さの声が多い。現状がそういう方向に進んでいるのであれば良いことだと思う。

＜図書館長＞

図書館はどなたでも利用できる施設であるので、現状の環境を維持しながら、利用する方が過ごしやすい環境をこれからも作っていきたい。

＜太田委員＞

今年度は東京オリンピックがありとても盛り上がった。身近な方が活躍して、子どもたちにも夢や希望を与えてくれた。町のスポーツ推進施策が実を結んだと考えているところである。コロナ禍において社会体育事業が実施できない状況にあり、今まで大会をやっていたノウハウがいざ次年度やろうというときに途切れがちになっている。職員も異動もあるので、継続するために何か工夫していることはあるのか。

＜社会体育グループ長＞

東京オリンピック・パラリンピックの関係で、９月から１２月にかけて、橋本勝也選手が町内全小中学校を訪問して体験談を話したり、ノーマライゼーションの理解を進めるということで児童生徒と交流を深めたりした。がんばることの大切さを伝えていただいて、そういった事業を展開させていただいた。

コロナ禍でスポーツ事業がこんなにも打撃を受けるとは正直思っていなかった。町の主要スポーツ大会として、さくら湖マラソン大会、みずウオーク大会、家庭バレーボール・ソフトボール大会の３つの大会を位置付けているが、ここ３年間開催できていない。さくら湖マラソン大会は次年度開催するということで準備を進めている。規模は縮小し、他市町村での対策などを参考にしながら、ゼロベースまではいかないが今までやってきたいい取組みを継承しつつ、見直しできる部分は見直しながら進めていく。

＜生涯学習課長＞

事業が中止になったことによる今後の継承について、特にさくら湖マラソン大会、みずウオーク大会は生涯学習課所管だが、役場全庁的に応援体制、協力体制をしいて事業を実施している。実施した年の担当者が仮に異動したとしても、役場内の多くの職員がそれらの事業に携わった経験を持っているので、その経験を元に事業そのものの継承ということは可能と考えている。

＜太田委員＞

三春は課を超えた連携ができていると聞いている。心強い。

＜町長＞

教育長から何かありますか。

＜教育長＞

いま一番心配していることは、子どもたちの自己肯定感である。小学６年生、中学３年生が全国学力テストのアンケートを受けて、「自分には良いところがある」と回答した生徒の割合に愕然とした。「どちらかというと」を含めると７０～８０％にはなる。日常生活で自分が人に迷惑をかけた時の子どもの対応を思い浮かべていると、謝ることができる子がいる一方、自分のせいではない、他の子もやっていると言う子もいる。そこには自己肯定感が深く関わっていて、謝ることができる子はそもそも自己肯定感が高く、謝って少しくらい下がっても大きなダメージではないと思うようである。ところが、自分のせいではないと言う子はそもそも自己肯定感が低いので、それ以上下がってしまうことが受け入れられず、自分を一生懸命守る行動にでると言われている。三春の子どもはどっちの傾向が強いのか。ローゼンバーグが自尊感情について二つの側面を話ししている。一つ目は人と比較して自分はどうか、二つ目は自分の価値基準で判断して自分はどうか。今の子どもたちのもめごとの大きな要因は、他者と比較して自分がどう思っているのかというところに大きな問題があるような気がする。子どもたちが自分のことをどう思っているのか、家族や学校のことをどう思っているのか、さらには自分の町をどう思っているのかということにつながるので、そのベースとなる自己肯定感を検証的に探ってみたい。大切なのは、自分はこれでいいのだと気づくということは、それにふさわしい自分の適応する行動があるのだということ。ありがとうと言われることは自己肯定感がアップす

るようなポイントなのだ、あいさつを自分から言えたことはそういうことなのだと丁寧に教えていくことが一番大事だと思っている。データでいうと確実に自分にいいところがあると断言できる子どもというと、現在はまだ若干低い。これが上がっていくことがすべての子どもたちの成長に大きなポイントになっていく。自己肯定感がどのレベルにあるのかということを気にしてみていただければ、ありがたい。

＜町長＞

最近の話題で、要田小学校が田村市では令和４年度をもって閉校するという話をいただいた。小学校の統合について、田村市と三春町とでは考え方が違っている。将来的にどのように変化していくのか気になるとことである。先月の２４日に田村市長さん、教育長さんがお見えになって、正式にごあいさついただいた。その中でお話しいただいた二点が印象に残っているので、紹介する。一つは、小学校がなくなると地域が滅びるという地域信仰の話とは別に考えてほしいということ、もう１点は、少人数のクラスで育ったのでは子どもが大きくなるにつれて学力面あるいはクラブ活動の面で遅れていってしまう、といった言い方をされていた。この２点が統合を進める理由であるとのこと。それぞれの考え方があるので何とも言えないが、三春町は歴代の町長が少人数教育の方がよかろうということで、統合問題については各地区から統合してくれと声が上がらない限り統合しないということであった。わたしも基本的には同じ考えだが、要田小学校に行けない子どもが三春小学校に行きたい、御木沢小学校に行きたいと言ったらどうするかということはすべて子どもを最優先に考えていくことになる。いずれまたいわゆる小学校統合問題が出てくると思っている。教育委員会としてはどう考えるかと必ず聞かれることがでてくると思う。引き続き委員さん含めて教育委員会教育長以下、各職員もぜひとも考えてほしい。基本的に子どもが大きくなっていくにあたって、小学校の時でないと学べないことがあるだろうし、先程教育長が肯定感という話をしたが、小学校時代、地域との関わりが増えてくる時期に地域と密接に過ごさないと大きくなったときどうなるのかと心配している。町長の一番大きな仕事は、将来の納税者を確保するということである。人材を育成する、企業にたくさん稼いでもらって税金を確保する、それで町を運営していく。それには小学校から郷土愛を育んでいく必要がある。小学生の役場見学等を見ていると、あくまで個人的な感想だが、小規模校の方が個性がよく分かるというか、目が行き届いていると感じる。大きな学校がだめということでなくて、どうしても一人の方が大勢の子どもを把握するということは物理的にも大変なこともある。ただそういっても中学校に行ってから学力が落ちたらどうするとか、それに対する答えはわたしは残念ながら持っていないが、小学校の時に大事にされた経験が必要ではないか。この話は高校生にも当てはまる。田村高校魅力向上委員会は、OB のみなさんに力を入れてやってもらっているのだが、全体 100 とすると非常に成績優秀というのは１割から２割、残りの人はいわゆる普通の生徒さんになる。自分が何に向いているのか再確認できないま

ま進学、就職をしている傾向があるように感じる。地域で大事にして、高校生くらいになれば地域に貢献して社会勉強をしていただくことが必要だと感じる。小さな町なので、手をかけて育てる余裕はあると思う。そこだけは反対意見はないと思うので行政を進めていきたい。雰囲気で流されることだけはないようにしていきたい。教育委員会には将来を見通したお話をまた後日聞かせていただきたいと思っている。

＜町長＞

進捗状況についての協議は終わりまして、（２）その他に移ります。教育全般について、ご意見、お考え等、発言いただきたい。

＜宮田委員＞

義務教育の子を持つ親に聞いた話の中で、三春中で学校に通えない子の数が多い。単純な原因ではなく、いろんな問題が複合されているとは思う。小規模校は一人一人の先生の見方もあたたかく、友達も助けてくれる。先生が目を配ることができ、本来支援が必要な子も困る前に助けてもらえている状況にある。困り感を感じずに小学校時代を過ごすことができて、中学校に行ったときに流れについていけず、ドロップアウトしてしまっている現状が見受けられるという話を聞いた。小学校は地域密着で地域の中で育てられている部分は大事なことであるし、あたたかい雰囲気はとてもいいと感じているが、そのあたたかさが本来の自立を少し押さえてしまっている現状もあると聞いたとき、初めての視点だったのでハッとした。どんな要因があろうとも、子どもたち一人一人の学びの保障をするのが大人の責任である。その子たちは学校に行かなくて楽で楽しいと思っているわけはなく、苦しい思をしている。既存の方法では無理かもしれないので、新しい方策を考えていかなければならない。

＜教育長＞

いくつか方法は考えていて、できるだけ早い段階で実現したい。不登校は増えてきている。どんな要因があるかということは、課の中でも分析的に話をしているのだが、例えば母親と分離することに抵抗を感じてしまってなかなか行けないとか、学校のシステムになじめずに何となく居場所がなくなってしまっている、あるいは、授業が難しくてついていけずに学校に行くことよりも家にいることを優先してしまうとか、要因は様々であるが、共通的なことは居場所である。課長からの説明で適応指導教室という話があったが、学校には行けないけれども家を出て居場所になるところを作りたい。あるいは、家庭しか居場所がない場合は授業の様子をタブレットで見られるような方法などもできるのではないかと考えている。子どもたち一人一人によってあまりにも現状の違いが多すぎるので、精査しながらいくつかの方策は準備している段階である。どこまでできるかどうかはやってみないと分からないが、大きな一歩を踏み出せると考えている。

＜太田委員＞

いろいろな家庭の中で育っているので、一律にとはなかなか難しい。学校教育でどこまでできるか。自尊感情が大切である。これから１００年時代、小学校で挫折しても人生やり直せる余地があるのだということを示してあげればと思う。まず、親といっしょにである。学校だけでは難しいと思う。学校に行かなくても素晴らしい人生があると思う。

＜宮田委員＞

道はいくつもあるということを伝える。生きる力を育むことが一番大事であるが、どんなに強い脚を持っていても、道に大きな岩があったら進めない。この道は進めないが、こっちにも道はあるということ、選択肢を気づかせてあげることも大事だと思う。子ども時代の幸せな記憶が三春町の将来を豊かにしていく原動力になる。

＜菊地委員＞

不登校が増えている件について、なにか原因があることだと考える。不登校の子どもたちの居場所を作って対応していくということなので、その中で仲間を増やして自己肯定感を高めていってほしい。

＜町長＞

教育長の話にあったとおり、これから具体的の取り組んでいくということである。不登校については以上とします。ほかになにかありませんか。

＜太田委員＞

教育大綱の基本理念にある「学びつながり未来を拓く三春の教育の創造」の未来について話しをしたい。学校の教育が大きく様変わりしている。ICT により一人一人端末を持ち、学習の可能性が広がった。５年後１０年後はどのような未来になるのか。子どもたちの教育には過去を伝えるのも、現在の三春町を知ることも大事だが、未来の三春町を考えることも大事である。学校運営協議会に参加している方は本当に熱心な方が多いのだが、若い保護者にもぜひ入ってほしい。新しいメンバーを入れながら、ICT を活用した未来を語れるような教育も必要だと考える。三春の旧庁舎解体があったが、SDGs を考えて壊している。三春城の VR 映像、滝桜オンラインバスツアー等、三春町商工会などの取組みも最先端である。学習の場に現在、未来を見据えたような教育を取り入れていただきたい。

＜教育長＞

学校運営協議会は地域の方たちに責任をもってやっていただいている。働き世代の方も関わってっていただくようなシステムは必要かと思っている。

＜太田委員＞

要田小学校の統合について、親は子どもにいい教育を受けさせたいと切実に考えている。子どもの能力を最大限に引き出すような学校に入れたいと思っている。この願いを受け止め実現

させていくのは教育行政だと思う。今回、要田小学校統合問題が浮上した。今、学区の保護者はどの学校に行かせるか考えていると思う。選択肢が増えている。親はネット等で学校の情報を見るなどして納得いく学校選びをしていると思う。その中に三春の学校を選択されているということは、今までの三春町が行ってきた教育行政の成果であると思っている。諸問題があることは十分承知の上だが、門戸を広げて保護者の意見に耳を傾けて受け入れてほしい。保護者に学校を選ばせる、これは子どもの自己実現を期待できる学校を選ばせることにつながることだと思う。これを機に要田小学校区だけではなく、すべての保護者に範囲を広げて、希望すれば町内の学校を選べる仕組みがあってもいいのではないか。そうすることで学校関係者ももっと切磋琢磨するのではないか。町内の学校を選べる仕組み、いろいろと問題はあるだろうが提言する。

＜教育長＞

一人一人を大切にするということは、すべての学校で過去から継承してやってきていることである。視点を踏まえながら、教育活動ができるような支援をしていきたい。そのうえで要望があれば耳を傾けていきたい。

＜宮田委員＞

宗像委員の意見で、現在学校に ICT が入って活動しているが、それと同時に創造的な活動も取り入れてほしいとあった。実際に手で触って感覚を感じとって何かを作り上げていくような創作活動大事なので、バランスよくやってほしい。

＜町長＞

協議事項については以上とさせていただき、議長をおりさせていただきます。

＜教育次長＞

４　その他に移ります。ご意見等なにかありますか。ないようですので、本日の会議は以上で終了させていただきます。ありがとうございました。